

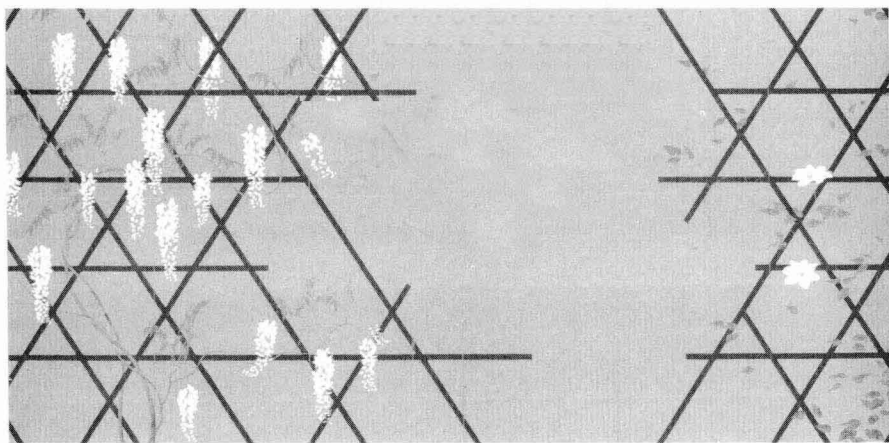
丹羽文雄

新潮社版

四季の旋律
下巻



丹羽文雄
四季の旋律
下巻



新潮社



© Fumio Niwa 1981, Printed in Japan

四季^{しき}の旋律^{でんり} 下卷 (全二卷)

昭和五十六年十一月十日印刷
昭和五十六年十一月十五日発行

著者・丹羽^{にわ}文雄^{ふお}

発行者・佐藤亮一

発行所・株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七十一

電話・業務部 (03) 二六六—五一—

編集部 (03) 二六六—五四—

振替・東京四—八〇八

印刷所・二光印刷株式会社

製本所・大口製本株式会社

定価・一〇〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

人 生 と は	動 揺	大 変 な こ と	五 風 十 雨	喜 劇 の 素	世 間 の 目	明 暗	た め ら い	激 突
------------------	------------	-----------------------	------------------	------------------	------------------	------------	------------------	------------

245	201	182	155	133	116	98	46	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	---

四季の旋律
下巻

激 突

車の中から瑠美は、妙義山の異様な山のすがたに見とれた。遠くからも眺められたが、近付くにしたがって、岩石だけが空につきささるようにそびえている姿は、ほかでは見られない風景であった。瑠美はすでに二度、妙義山を眺めていたが、何度来ても、最初のときのようなおどろきを覚えた。

「中国の文人画の中に、遠景で、岩だけでそびえているような奇妙な山が描かれているのをみて、画家の空想とばかり思っていたのよ。日本の国内で眺められる山の姿ではないわ。でも、テレビで、中国の風景が映されるようになってから、そうした奇妙な山が現実にあるのだということが判ったわ。妙義山をはじめてみたとき、中国風の山だと思った。岩だけで山になって、空につきささっているのね。岩だけで、草は一本もはえていないのね。風化して、いまに崩れるのではないかと、あの山を見るたびにそう思うのよ」

ハンドルを握る中根数富は、うなずくだけで、窓の外を見ようとしなかった。車は新しい碓氷峠の坂を上りはじめていた。新しく出来た道は、うねりくねっていて、ハンドルに神経を集中させなければならなかった。向こうからバスやトラックが来ると、数富は緊張した。

その内に妙義山が見えなくなり、山の中を車が走った。視界がふさがれていると、突然前方がひろがったりして、とんでもないところに妙義山が遠く眺められたりした。車は重なり合った山々の中腹や山頂をえらんで走っているようであった。

「耳がおかしいわ」

しきりと瑠美は、自分の耳をおさえたり、もんだりした。

「気圧のせいだよ」

「そうね」

「瑠美さんは、神経質だね」

「感じやすい方よ」

最近開通した関越道路を走っているときも、喋っているのは瑠美だけであった。数富は友達とたびたび軽井沢までドライブしていたが、瑠美をつれて来たのは、これがはじめてであった。

日曜日であった。空は高く晴れていた。周囲の山々と空を比較するので、空の高さがいっそうあざやかであった。軽井沢の賑わう季節は外れていたが、日曜日ということで、登る車も降りてくる車もかなりあった。

町にはいったら、どこかで食事をとろうと話合った。

瑠美のからだは、たえずゆれていた。山道のカーブが急なためであり、それにほとんどまっすぐな道でないせいもあった。

「東京から三時間でいけるのだから、今日はゆっくり軽井沢にいられるわね」

「片道七、八時間もかかったことを思うと、信じられないくらいだよ」

山肌にとりどころ紅葉をみかけた。

「いまの季節が、軽井沢のいちばん美しいときだよ」

「紅葉ね」

「赤いのはすくなくて、うちの庭のもみじは、ほとんど黄色だ。朝、目をさまして、窓を開けると、黄葉がいっぱい目にはいつて、息がつまりそうになるよ」

数富は前方をみつめて、口だけ動かしだした。

「一度は雨が降っていたし、一度は暑くて、軽井沢の町を歩いていても、避暑に来たって感じがまったくなかったわ。まるで新宿の雑沓を歩いてるみたいだった」

「今日の軽井沢は、瑠美さんに軽井沢のよさを満喫させてくれるよ」

「別荘は、町に近いの？」

「町の裏にあるよ」

旅館の庭つづきの一画に、中根家の別荘があった。二階建だが、まん中が吹きぬけになっていた。電話をかけておくと、別荘を管理している旅館が、別荘を開けて、風呂の用意までしておいてくれた。食事は旅館に出かけたり、町に出たりすればよかった。そのままかえれば、旅館の方で戸締りをしてくれた。

「別荘は、古いの？」

「父の代からだが、三十年ぐらいになるかしら。ぼくの生まれる前から、父たちは軽井沢に来てんだ」

夏間に来たとき、泊まる旅館がなくて、瑠美は友達と車の中で眠った。

ようやく数富の車が、踏切を越えて、町にはいった。

「通ってきた左側のゴルフ・コースに、プレーヤーがいたわ」

思い出して瑠美がいった。

「日曜だからね。このごろは軽井沢は夏だけでなく、一年中賑わっているらしいよ。冬はスキー

やスケートが出来る。日曜日は、マイカーが殺到するらしい」

「車が多いようね」

数富が、車をのり入れた。そこは中華料理店のパーキングであった。

一階のひろい食堂の、通りとは反対の窓際をえらんだ。瑠美は化粧室にはいって、顔をなおした。

泊まることは考えていなかった。またそうした会話もなかった。夕方に軽井沢を出れば、九時ごろには帰宅できるはずであった。軽井沢が信じられないくらい近くになった現実感が、瑠美には心丈夫であった。

メニューは、数富に任せた。たびたび会食しているので、瑠美の嗜好を数富が預かっていた。「食事以外の食べ物も、もちろん旅館からとれるけど、ここを出てから、ほしいものを町で買っていいようよ」

「山ごもりの食糧ね」

会話までが愉しかった。

「やはりシーズン・オフね。このお店も、人が少ないようね」

「夏間、東京から出張してくるお店は、ほとんど閉めている。中には、日曜日だけ開ける店もあるらしいんだ、昔はもっと淋しかった」

瑠美が笑った。

「年寄りみたいないい方ね」

「そのころからみると、この町は変わった。いまでは若者の町だよ」
はらがくちくなくなった。

ふたりは車にのりこんだ。旧道はにぎわっていた。

「夏間は、この通りは車がしめ出される」

「いまでもにぎやかじゃない？」

「こんなに人が来ているとは思わなかった」

車は徐行であった。旅館のパーキングに車を入れた。旅館の玄関に数富が顔を出すと、

「お待ちしてました」

番頭が走り出て来た。

「準備は出来てます、どうぞ」

右手の細い通りを抜けて、別荘に案内された。番頭は扉をあけると、その場から去った。

「うちから電話かけたの？」

数富がうなずいた。

「お母さん、知ってるの？」

「ぼくがこっそりかけたんだよ」

「知れたら、大へんね。お母さん、のりこんでくるわよ」

「まさか」

「私をつれて来たこと、番頭さんに喋るなと頼むつもり？」

数富は笑っていた。入ったそこは、洋間であった。数富がスイッチをひねると、何カ月も空家であった空虚な感じがすうっと消えるようであった。瑠美は、長椅子にかけた。暖炉があった。

「焚けるの？」

「裏手にまわると、まきがつんであるよ」

数富は、風呂場をのぞいた。湯の支度が出来ていた。

「風呂がわいている。瑠美さん、おはいり。風呂から上がって、夕飯まで町を歩いてみよう」

「夕食はどこ？ 旅館でとるの？」

「君の好きなように。旅館の食堂でもよい。客は少ないらしい。感じのよい食堂だよ」

「明日の勤めがなければ、今夜、ゆっくり泊まってみたいと思うわね」

数富は、何とも答えなかった。

「これでも私、無断外泊の経験はないのよ」

「外泊なんか平気だって感じをあたえるけど、瑠美さんは、そうじゃないんだね。判るよ」

「信頼してくれて、ありがとう」

椅子から立ち上がった瑠美が、風呂場の方を指さした。

湯殿の大きな鏡の前には、櫛や化粧水も一応そろえてあったが、化粧水が何カ月も使用されないままになっているのを見ると、瑠美はバスにはいる気持がなくなった。何カ月も留守にしていた別荘である。ホテルのような具合にはいかない。顔を洗うだけで、すませた。

「お湯にはいらなかったの」

「汗をかくほどでもなかったわ」

洋間の長椅子に戻った。

「じゃ、ぼくはさっとはいつて来るよ。せっかく旅館のひとがわかっておいてくれたのだから、使わないと気の毒だ」

瑠美は、洋間を歩いてみた。深紅の絨毯が、どっしりとした感じであった。大きなテレビがあった。壁の三十号大の海岸の風景画も、この部屋にふさわしかった。暖炉の上の置時計や弥勒菩薩の彫刻は、都会の応接間向きであった。

ドライ・フライが、赤い壺いっぱいにしてあった。いずれも山の草花であった。軽井沢で求めたものにちがいがなかった。瑠美は窓に立った。

——この黄色のもみじだったのか。

数富のいう庭いっぱい黄色のもみじの話を出した。町通りのすぐ裏であったが、ここまでは何の音も聞こえなかった。瑠美は吹き抜けを見上げている内に、二階にのぼってみたくなつた。だれもいないはずと思って、扉をあけた。

清潔な洋間であり、ダブルのベッドが中央に、模様のあるベッド・カバーをかけて、静まりかえっていた。ここにも大きな油絵があつた。つぎの部屋をのぞくと、ここは和室であり、鏡台や簞笥があつた。瑠美はゆっくり階段を下りた。

また椅子に戻った。

——自分のうちとは、生活の程度がちがう。

片付いている時よりも、ちらかされている時間の方が多い自分のせまい部屋を思い出した。こうした贅沢な調度品にとりまかれた生活も、またいいものだと思つた。羨しいと思うはずであつたが、瑠美は自分をみじめとは思ひなかつた。生活環境のちがいは、自分のせいではなかつた。

——その気になれば、私はこの別荘の主人公にもなれるのだ。

数富の母親は、猛烈に反対するであろう。しかし、数富を完全に自分のものにしてしまえばよかった。それはできないことではなかつた。二人は別居すればよいのだ。二人は高級マンションで生活をはじめ。瑠美はまた、部屋の中を歩きはじめた。空想がとめどもなくふくれあがつた。そしてどの空想も、実現可能であつた。

瑠美は、ふと空想をためてみたいなと思つた。現在の自分と数富の年齢を、都合よく忘れていた。

数富がはいってきた。

「案外、長湯ね」

「これでもいつも、もっといいねいにはいれと、小言をくらってるんだよ」

並んで、長椅子にかけた。着替えもせず、もとの服であったが、風呂上がりの清潔な感じがあった。

「いまこの別荘には、私と数富君だけね」

「旅館のものは、内線で呼ばない限り、絶対に来ないよ」

「ふたりきりね。何だか妙な気持にならない」

「妙な気持？」

「私たち、いつもひとに見られているでしょう。見られているって意識は、意識してなくとも、どこかに感じているものよ。それがまったくなくなったわ」

「解放感だね」

「数富君は、たばこを吸わないわね」

「吸いたいとも思わない」

「お酒は？」

「のまされればのむけど、自分から進んでのみたいとも思わないよ」

「品行方正ね」

「自発的でなく、いつの間にか品行方正の型にはめこまれてしまったみたいだ」

「手もちぶさたでしょう」

「テレビがあるよ」

「何かのものはないの」

「数富が立ち上がった」

「気がきかなかった。ごめんよ。何か注文しよう。コーヒー？ 紅茶？ それとも何かほかのも